茨木市立玉櫛小学校　全国学力・学習状況調査分析結果

令和３年１０月作成

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

（領域ごと）

①言葉の特徴や使い方に関する事項　課題が残る結果であった

②A話すこと・聞くこと　概ね良好な結果であった

③B書くこと　課題が残る結果であった

④C読むこと　良好な結果であった

（問題形式）

①選択式　概ね良好な結果であった

②短答式　課題が残る結果であった

③記述式　概ね良好な結果であった

（無解答率）　やや課題が残る結果であった

（その他）
・最も正答率の高かった設問　２二選択問題（ことばの特徴や使い方に関する事項）
・最も正答率の低かった設問　３三（２）オ選択問題（ことばの特徴や使い方に関する事項）
・最も無回答率の高かった設問　３三（１）ウ短答式（漢字）
・最も無回答率の低かった設問　１三　２一　２二（話すこと聞くこと、読むこと、ことばの特徴や使い方に関する事項）

分析
・「読むこと」の正答率は高く、「書くこと」の正答率は低い結果となった。

・全国と比較した時に大きく低かったのが設問３二（記述式）
児童の解答類型を見ると、自分の意見は書くことができている。しかし、意見に対する理由や本文の言葉や文を取り上げて書くという条件を満たすことができない児童が多かった。また、無回答率も高い結果となった。
　設問２三も同じく記述式の問題だが正答率は全国平均より概ね高かった。設問３三（自分の意見やその理由を書くのではなく、必要な情報を見つけることができるかという問題）の正答率からも記述式問題に大きな抵抗がないことがわかった。今後は、自分の意見を述べながら理由や本文の言葉を用いる経験を更に積ませることや重点的に指導するため授業改善をすすめていく。
・漢字の書き取り問題が３問出題されていたが、総じて無回答率が高かった。

○●算数●○

（領域ごと）

①A数と計算　概ね良好な結果であった

②B図形　概ね良好な結果であった

③C測定　概ね良好な結果であった

④C変化と関係　概ね良好な結果であった

⑤Dデータの活用　概ね良好な結果であった

（問題形式）

①選択式　概ね良好な結果であった

②短答式　概ね良好な結果であった

③記述式　概ね良好な結果であった

（無解答率）　概ね良好な結果であった

（その他）

分析

・設問1（3）、設問4（2）は全国の正答率よりも上回った。しかし、無回答率が特に高い設問でもあった。このことから、高位層と低位層の差が大きくあることがわかった。

・設問4（3）割合の問題が、今回のテストで最も低い正答率となった。「30mを1としたとき、0．1にあたる長さ」を理解することができないと解答が難しい問題になっている。児童の解答類型を見ると、ここでつまずいている児童が多いことがわかった。問題用紙には【ゆうまさんの説明】というものがある。そこには、「20mを1としたとき、0．1にあたる長さは2mです」と書かれていたが、30mの場合の0．1にあたる長さを解答することができない児童が多かった。このことから「1あたり」という意味や使い方の学びを深めていくことが必要だということがわかった。また、無回答率も今回のテストで最も高いものとなった。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

・国語、算数どちらの正答率も上昇していた。全国の正答率と比較すると国語はわずかにおよばず、算数はわずかに上回る結果となった。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

・ここ数年は**低位層の数値が増加傾向だったが今年度は数値が減少し、中位層の数値が増加した。また、高位層の数値も増加した。**

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

本校の取り組み

１．プリント学習

本校では読解力の課題からリーディングスキル向上を目指し、校内の学力チームから出されるプリントに取り組んでいる。主語、述語関係の文章を読み取ったり、指示語が指すものを考えるといったものだ。初めの頃は、選択式問題にし、取り組みやすいものとしていた。しかし、児童自身が考えたことを言葉として表す力が必要だと考え、選択式から記述式に移行している最中である。

２．MIM（ミム）

主に１年生を中心に、語を正しく読む力と流暢性を養う活動をしている。指導パッケージの「ちょっとかわったよみかたのかきとりしゅう」と「ことば絵カード」を使いながら、間違いの多い拗音や促音のつまずきを減らすことを目標にMIMに取り組んでいる。１学期末に行ったアセスメントでは、正解数は少なかったが、今後も学期末にアセスメントを行い伸び率を見とっていく。

３．図書室の利用頻度を高める

読書は国語力を構成し、「考える力」「感じる力」「想像する力」を育むうえで中核になるものとなっている。このことから、本校では図書室の利用頻度を高めていくことを目標としている。

本校では、図書チームの先生と委員会の児童が中心となり、児童が図書室に足を運ぶようなしかけづくりを行っている。そして児童の多くが本の楽しさやそこでしか学べないことに気付けるように努めている。